

[研究ノート]

「日常のポエジー」についての考察
— ヘルマン・バウジンガー著
『語ることについて—日常のポエジー』をもとに

金城ハウプトマン 朱美

1. はじめに

ヘルマン・バウジンガー (Hermann Bausinger) はゲルマニストであり、特に戦後のドイツ民俗学を変革した民俗学者として名高い。退官後も執筆活動を続け、バウジンガーの主要な著書は日本語、英語、中国語などにも翻訳され、国外の民俗学研究にも影響を与えてきた¹。河野眞がバウジンガーの著書を多数翻訳しているため、ドイツ民俗学やバウジンガーの研究内容について日本でも知られている。著書『語ることについて 日常のポエジー』²を手にする前に2021年11月24日に95歳で逝去された。

バウジンガーが最終講義をおこなった際に、今後は「分厚い本ではなく短い論説を書きたい」と話していたように、『日常』はオーディオブックも出版されていることから、一般読者向けであり専門書ではない。口承文芸研究の概要やその研究対象になる語りについて、語られるシチュエーションについて事例と思しきエピソードを交えながら解説し、楽しみながら学べ、語ることについて考えさせられる作品である。メルヒェンや伝説といった民間伝承を研究対象としたいいわゆる伝統的な

1 Vgl. Bausinger, Hermann: *Volkskultur in der technischen Welt*. Erweiterte Ausgabe. Frankfurt a.M./New York: Campus 2005 (erstmalig 1961). Bausinger et al.: *Grundzüge der Volkskunde*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1999.

2 Bausinger, Hermann: *Vom Erzählen. Poesie des Alltags*. Stuttgart: Hirzel 2022. 以下、本文では『日常』と示す。

「口承文芸研究」(Erzählforschung)を中心に、戦争捕虜体験やインタビューでの語りなども研究対象としているドイツ語圏の新しい「語り」研究(Erzählforschung)についても少しふれている。

巻末の補足も含めると205ページあり、厚みはあるけれども専門書や学術論文とは異なり、文字は少し大きめで行間も広く設定されているため読みやすく、表紙の文字はカラフルで書店で目を引く装丁になっている。目次を開いてみると、各章や節に番号が付いていない。章に当たる「見出し」は太字で表示され、「導入」「日常における語り」「伝統の存続－語りのマスター」「ことば－初期援助とスタイル決定」³「補足」と5つのパートから構成されている。導入は「誰でも語ることができる」の文で始まり、第3章は「話からの解放」と第1章の最初の節のタイトルと同じ言葉で筆が置かれ、次に新たな話が、別稿でまた語られるのかと期待させる。しかし、もはやそれはありえないため、読後に寂しさを感じる。

果たして、バウジンガーは『日常』で読者に何を伝えたかったのだろうか。メディアと科学技術の発展を考慮しつつ、さまざまな「語り」(Erzählungen)のジャンルを確認しながら、本書をまとめて、「日常のポエジー」のことばの意義について考察することを本稿の目的としたい⁴。

2. ヘルマン・バウジンガーと口承文芸研究

バウジンガーは1926年9月17日にシュトゥットガルト近郊のアーレンで生まれた。兵役と戦争捕虜生活の後、チュービンゲン大学でゲルマニスティク、英語学、歴史と民俗学を専攻した。彼が築いたチュービンゲン大学ルードヴィヒ・ウーラント経験文化科学(Empirische Kulturwissenschaft)研究所から多くの門弟を輩出した⁵。1952年の学位論

3 以下、便宜上「日常における語り」を第1章、「伝統の存続：語りのマスター」を第2章、「ことば－最初のヘルプとスタイル決定」を第3章と呼ぶ。

4 本稿は2022年11月19日に開催された西大学独逸文学会研究発表会での口頭発表をもとに内容を再構成し加筆した。

5 Schenda, Rudolf: "Bausinger, Hermann". In: Brednich, Rolf W. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Bd. 1, De Gruyter, 1977, Sp.1404-1406.

文では、これまで注目されてこなかった「日常生活の語り」(Alltägliche Erzählung)⁶を研究対象とし、ナチス時代の民俗学から距離を置いて、話に内在するドイツ的なものを探ることはなく、また話の信憑性を問うこともなく、純粹に日常会話で話されたことを研究対象とし、その語りの形式を考察した⁷。それまでの口承文芸研究では、メルヒェンや伝説といった長年にわたり語り継がれたり読み継がれたりしてきた話のテキスト分析やその起源について議論されてきた。科学技術の発展にともない労働と生活様式も変化し、こうした古い伝統的な話は現代で語られる機会が減ってしまった。しかし、古い話をベースにした新しい話は日常的に語られ、メディアなどで受容されている点にパウジンガーは注目した。こうして、1952年以降は1度しか語られないような話でも、日常生活で耳にする話が研究対象とみなされるようになったのである。そして1980年代後半から、現代伝説(moderne Sagen, Sagen der Gegenwart)と呼ばれる新しいジャンルが登場した。これは、主に人づてに聞いた話で、嘘のように聞こえるが実際に起こった話である。ロルフ・W・ブレードニヒ(Rolf W. Brednich)やヘルムート・フィッシャー(Helmut Fischer)らが現代伝説を収集し、現代伝説集を出版した。1990年代には、これまで主流であったメディア、ラジオと電話、ファックスに加えて、パーソナルコンピューターとインターネット、Eメールが一般家庭にも普及し始めた。さらにドイツ再統一後に海外旅行に出かける人も増加したことにより、話が伝播する速度が速まり、伝播する範囲も広がった。こうして現代伝説(研究)ブームといえるような現象も起きた⁸。

6 Bausinger, Hermann: Art. „Alltägliches Erzählen“. In: *Enzyklopädie des Märchens*. Bd. 1 (1977), Sp. 323-330.

7 こうして歴史の見地を考慮しつつ現代の日常生活における文化事象を考察するという民俗学的研究法を最初に実践した。パウジンガーは、有形あるいは無形の文化事象を現代的に解釈したり、意味づけたりするハンス・モーザーが提唱したフォークロリズム(Folklorismus)を進展させた。彼の教授資格論文『科学技術世界のなかの民俗文化』(河野真訳 文楫堂 2005年)では、時間的、空間的、社会的観点から日常生活における科学技術と諸文化、それらを実践している人びとについて考察している。戦後ドイツ民俗学と現在の研究動向の紹介は別稿に譲りたい。

8 Vgl. Kaneshiro-Hauptmann, Akemi: *Betrachtung der modernen Sagenforschung* –

バウジンガーは、『民のうたごころの形式』⁹で、創作された言葉である「民のうたごころ」(Volkspoese)を出発点にし、「語り」のさまざまな形式について分析している。民間伝承をジャンル化し、それぞれの特徴について考察し、ゲルマニスト向けに書かれた。ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリム (Jacob Grimm und Wilhelm Grimm) が19世紀に『ドイツ伝説集』で、「メルヒェンはより詩的であり、伝説はより歴史的である」 („Das Märchen ist poetischer, die Sage historischer“) ¹⁰と表現したことが、民間伝承のジャンル分けの始まりだとされている¹¹。20世紀に入り、アンドレ・ヨレス (André Jolles) は民間伝承を聖者伝 (Legende)、伝説 (Sage)、神話 (Mythe)、謎解き (Rätsel)、格言 (Spruch)、出来事 (Kasus)、回想録 (Memorable)、メルヒェン (Märchen)、ヴィッツ (Witz)¹²と9つのジャンルに分類した¹³。その後もジャンルの分類が試みられてきたため『メルヒェン百科事典』に「ジャンル分け問題」(Gattungsproblem) ¹⁴という項目が立てられているほど、民間伝承のジャ

Begriff, Geschichte, Rezeption und Problematik – 関西大学独逸文学会編『独逸文学』、第45号、2001年、151-178ページ。ちなみにバウジンガーは彼らよりも早い時期から、のちに現代伝説と呼ばれるようになった話について言及している。Vgl. Bausinger, Hermann: *Formen der „Volkspoese“* (Grundlagen der Germanistik Bd.6) Berlin: Schmidt, 1980, S.193f.

- 9 Bausinger (1980). *Volkspoese* の訳語は河野眞の以下の翻訳書を採用した。ヘルマン・バウジンガー著／河野眞訳『Formen der “Volkspoese” 口承文藝の理論 <民のうたごころ>の諸形式 Form of “Folk/Poetry”』、2021年、あるむ。この翻訳書の書誌紹介あり。金城ハウプトマン朱美「ヘルマン・バウジンガー著／河野眞訳『Formen der “Volkspoese” 口承文芸の理論 <民のうたごころ>の諸形式 Form of “Folk Poetry”』」、日本民俗学会編『日本民俗学』第307号、2021年、110ページ。
- 10 Brüder Grimm: *Deutsche Sagen. 3 Bde. Hrsg. von Hans-Jörg Uther und Barbara Kindermann-Bieri*. München: Diederichs, 1993, S. 15.
- 11 Voigt, Vilmos: Art. „Theorien der Erzählforschung“. In: *Enzyklopädie des Märchens*. Bd.13, 2.Lieferung, 2009, Sp. 486-494, hier Sp.489.
- 12 この言葉に対応する日本語訳が存在しないため、言語を日本語表記にした。
- 13 Vgl. Jolles, André: *Einfache Formen. Legende, Sage, Mythe, Rätsel, Spruch, Kasus, Memorable, Märchen, Witz. 7. unveränderte Auflage*. Tübingen: Niemeyer, 1999 (erstmalig 1930).
- 14 Vgl. Honko, Lauri: Art. „Gattungsprobleme“. In: *Enzyklopädie des Märchens*. Bd. 5,

ジャンル分けは口承文芸研究者のあいだでは切実な問題であるようである。

パウジンガーが晩年に執筆した『日常』において、厳格にジャンル分けしているというわけではなく、メルヒェンとヴィッツに重心を置いて口承文芸研究をいわば俯瞰している。

3. 『語ることについて 日常のポエジー』について

ここで目次を紹介する。

目次

導入

第1章 日常における語り

話からの解放

ついでに話すという技

いつも自分から語る

ペールマン「語りの理論」

意味のない話の意味

第2章 伝統の存続—語りのムスター（型）

メルヒェン—遊び

メルヒェンとウソ

話のモラル

信じられないことを信じる

あなたは間違っています

第3章 ことば—最初のヘルプとスタイル決定

ことばで遊ぶ

話を高揚させ、オチがあり、制限すること

口承/書承、オンライン・オフライン—両者の相互作用

数についての話

付録

先にも述べたが、導入の後は3部構成になっている。各章の内容を要約してみると、第1章では、さまざまな話術ともいべき技について紹介している。まずホームパーティーと思しき場所に人が10人集まっている。電話が鳴り、ホストが電話を取りに行くと、誰かが「携帯電話だったら便利だよ」と言い出すことから、携帯電話をめぐる会話が始まり、ひとりが空の上から携帯電話を落とした人の話を披露する。話のオチが語られた後、聞き手が「えー！」(Wow!)「バカげてる！」(Wahnsinn!)などと反応することで、語り手はその話から解放されるとバウジンガーは言う。そうした反応がない場合でも、語り手が「本当にあったことなのです！」(Das stimmt wirklich!)といった言葉で話を閉める時点で、話から解放されたとしている。語り手は無意識のうちに聞き手から横やりを入れられないように自分の話を展開し、話を閉じる。語り手は同情を誘うような話、たとえば入院生活中の話を語ることもある。ときにはある行為を正当化するために、語り手が事実をそのまま語らないこともある。なぜなら事実を語ると聞き手に悪い印象を与えるかもしれないので、事実を別の視点からとらえなおして、語り手の印象を良くするように語りなおすからだ。語り手はこうした話をなんの脈絡もなく唐突に語りだすのではなく、会話の途中で適切なタイミングをみつけて瞬時に話を会話の中に織り込む。そして、待っていましたといった顔で語るのではなく、あたかもついでに語っているようにふるまう。この一種の技ともいえる話術は、各人に備わっていると冒頭のことは「誰でも語ることができる」から推測できる。

一連の会話や話の構造は、社会言語学的に分析できるとバウジンガーは言及している。過去の出来事は記憶をたどって語られ、そのさい記憶が自分の都合の良いように書き換えられることもありうるとしている。そのため記憶はでっち上げといえるのではないかと述べており、小説の一節を紹介し、次章のテーマのひとつ「メルヒェンとウソ」にリンクすることをほのめかしている。

同じ話を語ったり聞いたりすることは、一見意味のない行為だと解釈されがちであるが、その繰り返しが何らかの習慣や行事などと結びつくこともあるので、本書ではドイツでクリスマス前に再三テレビ放映され

る映画「灰かぶりの三つのハシバミの実」を例に挙げている¹⁵。バウジンガーはここで造語「Mit-Teilung」をもちいて、何度も聞いたことがある話であっても、その話を伝えることと話を分かち合うことの重要性を説いている¹⁶。

第2章は「メルヒェンは遊び」から始まりヴィッツに話題が移る。というのもメルヒェンには遊びやゲームのように決まりごとがあり、ことばを操って遊ぶからだ。たとえば、「白雪姫」を例に挙げてみる。森に住む7人の小人の家で生活していた白雪姫を、変装した継母が3回訪れる。メルヒェンでは3、7、12など特定の数字が好まれると言われるが、これは語り手の好みで元の話が書き換えられた結果であり、3回繰り返すことはメルヒェンの決まり事になっている。ここに出てくる数字に関して第3章につながる。こんにちメルヒェンを語る人は、何らかの種本を覚えて自分なりにアレンジしたり、本を朗読したりしているので、それも言葉を使う遊びの一種だとバウジンガーは解釈している。1812年と1815年にグリム兄弟によって編集された『子どもと家庭のメルヒェン集』¹⁷は、当初は、市民階級の家庭にとって子どもに道徳を教授するための教育書であったが、時が経つにつれて道徳本としての特性は薄れていく。1920年以降、メルヒェンは国語の授業でロールプレイ教材として使用され、遊びの要素が加わる。メルヒェンは、主人公が結婚したり裕福になったりしてハッピーエンドで終わることが多い。しかし、主人公が幸せをつかむまでに、ひどい経験をしたり、困難な問題に立ち向かったりしている。メルヒェンの世界ではファンタジーと現実が互いに補完し合っているが、現代におけるメルヒェン作品は作家それぞれの決まりに沿って語られ、現実的要素も保持しているとバウジンガーは言

15 筆者の考察も参考にされたい。金城ハウプトマン朱美「ドイツのクリスマスとメルヒェン」、関西大学独逸文学会編『独逸文学』第59号、2015年、223-227ページ。

16 wie Anm.2, S.57.

17 Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. von Heinz Rölleke. Bd. 1, Stuttgart: Reclam 1991 (erstmalig 1980). Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. von Heinz Rölleke. Bd. 2, Stuttgart: Reclam, 1995 (erstmalig 1980). Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. von Heinz Rölleke. Bd. 1, Stuttgart: Reclam, 1994 (erstmalig 1980).

う。1970年代以降、グリム童話がパロディー化されるようになり、メルヒェンの主人公が現実世界に持ち込まれるという形で現れた。この主人公が置かれた状況は絶望的ではなく、勇気を持つことで状況を変えられるというメッセージを発しているとされる。たとえば「ホレおばさん」に登場する怠け者のマリーが、労働組合員として労働搾取を訴えている例を挙げている。メルヒェンという遊びで内面の力を動かすこともあり、希望を持つ幸せ (Hoffnungsglück) を感じることができ、ヨーロッパのメルヒェンは自分と向き合い、現実へ目を向けさせているとパウジンガーは説く。

一方で、信じられない話を聞いた人が語り手に「作り話をするな！」(Erzähl keine Märchen!) と責めることがある。では、メルヒェンと作り話は同義語であれば、メルヒェンは嘘を語っているのかとパウジンガーは疑問を呈する。その答えとして、メルヒェンは空想の産物であり、娯楽のメディアであり、真実ではない (Unwahrheit) とまとめている。文学作品も空想の産物であるから、メルヒェンと同じかということ、そうではなくメルヒェンに近いが同等ではないという立場をとっている。メルヒェンはその語の語源をたどると噂話という意味があることから、長い年月をかけてさまざまな人によってひとつの話が語られ続けたことで、話の内容もスタイルも確立し、表現も整えられていったため、嘘の話とも作家が言葉を練り上げた作品とも異なるのだろう。

口伝えで話を聞く他、新聞などのメディアからさまざまなニュースを得られるようになり、そうしたニュースを自分の言葉で再話し、新しい話生まれる。新しい話が生まれては忘れ去られ、また類似した話が出てきては忘れ去られることの繰り返しが続いている。しかし最近流行しているソーシャルメディアでは、事実に基づくニュースでなければ、でっち上げられたフェイクニュースと称され、陰謀論もその類に入れられる。現代伝説と陰謀論の違いは、友達の友達などに実際に起こった事実の語りであるから、聞いた人をたどっていけば、当事者が判明するかもしれない点だろう。

日常で起こりそうなことが実際には起こらない、でっち上げの事柄を語るが、リアリティーがあるのでそこに面白さを感じ、笑いを誘うのがヴィッツである。ヴィッツにはブラックジョークのような悪質なことば

遊びの側面もある。特定の地域や国の人に向けられている偏見をジョークにした話は、ヴィッツだからと（まだ）許されている。ヴィッツは語られるだけではなく、ことばに図像が添えられることがあり、風刺画がその一例である。風刺画を見てすべての人の笑いを誘うかというところではなく、政治問題に関心のない人には理解できず、面白いと感ぜない場合もある。

第3章では、語彙や言語運用能力と数がテーマになっている。外国語で話すときに間違った語彙を使って話した時や、外国語を勘違いして理解した時の笑いについて述べている。「ことばは、一義的でなく、複数の意味を持つ。的確に表現しているのではなく、簡潔にして含蓄に富んでいる」¹⁸から、誤解がもとで笑いが生じる。これがヴィッツにもなる。また意図的に語り方を工夫することで話の面白さを増大させることができる。慣用語や *Kinder und Kegel* といった慣用対語で響きのあることばを使うことで、語りが詩的になり、批判を相対化できるとバウジンガーは述べる。語りを「終わりよければすべてよし！」(Ende gut, alles Gut!) や「一度嘘をつくと…」(Wer einmal lügt…) で締めくくすることで、話から解放され、数字を利用して（あと1秒遅かったら…など）いかに自分がツイていたのかを表現し、話を盛り上げてから話から解放されることもあるとしている。

話す相手が移民の場合、俗語を理解できないかもしれないし、ネイティブは移民の人が表現したいことを誤解する恐れがある¹⁹。しかし、言葉の問題があるのは移民だけではない。言語獲得中の子どもも引き合いに出されており、バウジンガーは移民の言語運用力を問題視しているわけではないことがわかる。

話の長さは、語りのジャンルにより異なる。ヴィッツは短いのが特徴である。さまざまな話を書き留められるようになったのは19世紀からで、それまでは一般の人が手紙やはがきを書くことはなかった。これは識字率の向上と、郵便網の発達などに関係している。話の長さもメディアとその使用料などと関連している。1960年代ごろから電話が一般にも普及し出すと、紙媒体ではなく電話でも話をするようになる。電話代

18 wie Anm.2, S.150.

19 Ebd. S.165f.

が下がるまで時間がかかったが、その間に携帯電話が登場したことにより、直接会って話をする機会が減った。現代ではさらにEメールとチャットアプリも加わり、特に若い世代は対面で会話する機会が減ってきているようだ。パウジンガーは観察し、以下のように再話とメディアについてまとめている。

数百年以上前には、本に収められた話を読んだ人が文字を読めない人たちに語り、それを聴いた人たちが自分たちの言葉でまたその話を語り継いでいた。識字率が上昇する前には文字を読める人（牧師や教師）が新聞を読み上げていて、それを聴いた人が面白い話として語っていた。その次の段階として、面白い話が家庭用雑誌に収められるようになり、イラスト付き日刊新聞も18世紀末には出版され、19世紀半ば以降から画報も発行されるようになり、写真も活用された。そういう媒体から得た話や見た写真について人びとは他の人に語るようになった。20世紀初めに映画が流行し、映画館で見た（無声）映画を語るようにもなる。ラジオはナチス時代にプロパガンダに利用されたことで有名であるが、ラジオで聞いたニュースなども人びとに語られた。戦後、テレビが普及し始めると、テレビで見たニュースなどが語られるようになる。

次に語る手段も変化した。コンピューターが1990年代から急速に普及し出し、書面のコミュニケーション方法が変わり、公的文書だけではなく、プライベートの手紙も郵便で送られなくなり、Eメールでの発信が主流になっていった。そして、長い文章を書くよりも、短い文を交わすように変化している。文章の短文化はソーシャルメディアの登場で拍車をかけているようだ。ドイツでは日本ほど利用されていないツイッターだが、140字で語ることが要求されている。ユーザーを限定しないし、ユーザー名も本名ではないことが多いので、誰が読んでいるのかわからない。そのためパウジンガーは半分オフィシャルなコミュニケーションと呼び、また反社会的なメディア（Asoziale Medien）と呼ばれていることも紹介している。とりわけ（ドイツでは）若い人たちがナルシスト的な感情からセルフイーを撮り、コメントを添えていることから、身近ではない人にまで自分をアピールしているようだ。と解釈している²⁰。

20 Ebd. S.175.

陰謀論を広める極論者と新聞など読まない学歴が低い若者がつながりやすくなっているのではないかとバウジンガーは懸念している。もうひとつ注目しているのは、詐欺の話である。ドイツにも「オレオレ詐欺」のような電話詐欺の話（Enkeltrick）や、結婚詐欺師の話、さらにそういった話を聞いた人のなかで同情を寄せるのではなく、他人の不幸を喜ぶ（Schadenfreude）人もいることから、批判に目を向けられていること、だまされていることに気付かないのが悪いという意見がある。バウジンガーは人をだますための語りは語りとは言わず、嘘とし区別している。語りは、その内容に縛られず、コミュニケーション手段として外に開かれ、語るという行為はコミュニケーション力ではなく、人生と世界の多様性をみることができ、それが魅力であると主張している。

最後に数と語りについて取り上げられており、ここでは誕生日について紹介する。ドイツではいくつになっても誕生日会を催す。そのさい、年をとれば若い人からその人の人生について尋ねられることがあるそうだ。こうして思い出話が語られる。誕生日会は、人と人とのつながりを確認できる場である。コロナ禍に移動がままならなかった時期には集まることができなかつたため寂しい思いをし、人とのつながりの重要性を感じるようになったであろう。

記憶に残る数字は誕生日だけではない。2001年9月11日や2011年3月11日など大惨事や大災害が起こった日には、当事者でなくてもその日に何をしていたか鮮明に覚えていることもある。また被害者の数を聞いただけで、災害の規模を推測できたりする。何かを語る時、数が語りには欠かすことができないことを最後の節で示したため、「話からの解放」との言葉でバウジンガーは筆を置く。『日常』をひとつの長い語りにとらえると、語りと数は切っても切れない関係にあることがオチになるのだろうか。と考えると、それでも「誰でも語るができる」と冒頭にまた戻るような気がする。語りをめぐる考察は堂々巡りを繰り返し、ジャンルのことを考えてもはっきりとした答えがでないのも当然で、思考があちこちに飛んでは戻りながらも考え続けるのは、話が何度も再話されていくことと同じですよといったメッセージを筆者は読み取った。

4. 「日常のポエジー」とは

自分の言葉で紡ぎ出した、日常で人びとが語るさまざまな話の芸術性の高さは問題にされない。普段の生活でポロリとでてくるエピソードや新聞で読んだ話など、日常生活で語られ、話者の年齢や職業、収入、学歴も考慮することなく、たわいもない話も、聞いたことあるメルヒェンを再話することも、うわさ話や経験談、伝説もあれば陰謀論も悪意のない話は「日常のポエジー」であると筆者は解釈した。また、リアルに生きている人たちが自然に語る話と言い換えることができないだろうか。「民のうたごころ」は過去の幸せな時代へ引き戻してくれることを理想としていた²¹。「日常のポエジー」も場合によっては、たとえば「あの頃は良かった」と思い出話をするときには、「民のうたごころ」と同じ機能を持っていると考えられる。ここでひとつ疑問がわいてくる。「日常の語り」とは何だろうか。「日常のポエジー」では、語り手が語ることでことば遊びをして楽しむことも含まれるから、あえて新しい呼び名を考案したのではないかと考えた。つまり「日常の語り」を拡大したのが「日常のポエジー」ではないか。また、*Volkspoesie* という語は、*Volkskunde* という語をパウジンガーが使わなくなったように²²、*Volk* を使わない日常の語りの新しい表現で、*Volkspoesie* と並ぶ語として、*Poesie des Alltags* と名付けたのではないだろうか。

人は語ることができ、「語るのが人」とであると人の特性をクルト・ランケ (Kurt Ranke) が表現したことに通じる。人が語るからには聞いてもらえる人が必要である。200年前とは異なり、語り手と聞き手が同じ空間にいらなくても、今ではヴァーチャル空間でも語りあうことができる

21 Ebd. S.11.

22 ドイツでは、民俗学が第二次世界大戦中にナチスに利用されたことから、戦後は戦中の研究とは一線を画すが、現代を読み解く際に過去の研究に目を背けていない。研究対象を日常に求め、民俗学が日常学へと発展するきっかけとなったのは、ヘルマン・パウジンガーの研究姿勢であり、パウジンガーを中心とした民俗学者による、古い民俗学との決別であり、あらたに独自の研究方法を確立すべく、社会学的・人類学的手法などを取り入れながらとる経験文化学として発展している。

ようになった。バウジンガーは読者に話を「語り、聞き、読む」ことに加え映像を見ることでも話を詩作していることと、同時代のメディアを活用しながら人とコミュニケーションをとり、できれば直接会って話をするので、「語る」ことの楽しさを（再び）体験してほしいという望みから『日常』を執筆したのではないか。

5. おわりに

バウジンガーは、戦後のドイツ民俗学の発展に多大な影響を与えたにもかかわらず、最後の仕事は現代民俗学についてではなく、語り研究に捧げられた。その前には、シュヴァーベン文学の紹介に努めていたことから、経験文化学者でありながらゲルマニストであった点を強調しているかのようで印象的であった。もしかすると次作は経験文化学に関する論考だったのかもしれない。新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、人と人との交流が身近な人との間でさえも制限された時期があり、このウイルスが流行してから3年ほど経過しても、まだパンデミックは終息していない。そのような状況のなかで、人とのコミュニケーションの大切さを再確認されて、語りについてまとめられたのかもしれない。執筆者はこの遺作から、人生のはかなさと語り研究の面白さを再認識することができた。

ところで、今や人工知能が新聞記事を書き、ニュースを読み上げることができるようになった。この先、人型ロボットがさらに進化し、人間のように会話の途中で思い出したエピソードを自然に会話に織り込んで、語りだすことができるようになれば、新しい語りの文化ができるのだろうか。外国語を自分で運用でなくても人工知能に助けられて、世界中の人とどこにいても話ができるようになるのだろうか。そうなれば、何を語るのだろうか。今後の語りの文化の発展を楽しみにしている。

文献一覧

金城ハウプトマン朱美「ドイツ民俗学における口承文芸研究について」、関西大学独逸文学会編『独逸文学』第54号、2010年、123-148ページ。

Bausinger, Hermann: Art. „Erzählforschung“. In: *Enzyklopädie des Märchens*. Bd. 4, Berlin:

de Gruyter, 1984, Sp. 342-348.

Brednich, Rolf W.: *Methoden der Erzählforschung*. In: Göttsch, Silke/Lehmann, Albrecht (Hg.): *Methoden der Volkskunde. Position, Quellen, Arbeitsweisen der Europäischen Ethnologie*. Berlin: Reimer, 2001, S. 57-77.

Röhrich, Lutz: *Erzählforschung*. In: Brednich, Rolf W. (Hg.): *Grundriß der Volkskunde. Einführung in die Forschungsfelder der Europäischen Ethnologie. Dritte, überarbeitete und erweiterte Auflage*. Berlin: Reimer, 2001, S. 515-542.